



いっしょに、トップをめわわ

サイエンス・シティ

～学術研究都市50年・筑波大学40年・TX10年～

連載第4回

作家 高崎哲郎

筑波大学の創成する精神①～IMAGINE THE FUTURE～

「本学は二つの金メダル獲得を目指しています。一つはノーベル賞のそれ、もう一つはオリンピックのそれです」「本学は国内外に「開かれた大学」を積極的に進めています。世界のトップレベルの研究者で University of Tsukuba を知らない人はいないと思います」

筑波大学の複数の副学長氏が確信に満ちた口調でこう語り笑顔をこぼした。大学のキャンパス内での取材や大学外での資料収集を重ねるにつれて、副学長氏の発言は決して勝手な誇張や理想論ではなく、現実の確実な動きを語っていることを知った。国立大学や高等研究機関で「一つの金メダル（ノーベル賞）」を目指せる大学は少なくないかもしれない。だが「二つの金メダル獲得」を目指せるのは筑波大学にまず指を折るのが順当のようである。

筑波山の麓付近に広がるつくば市には3つの大学がある。国立大学法人筑波大学、同筑波技術大学、学校法人（私立）筑波学院大学である。この中で頭脳都市・筑波学術研究都市を代表するのが筑波大学であることは論を俟たない。関東甲信越地方に限れば、東京大

学に次ぐ（または並ぶ）国立の総合大学といえよう。まず同大学の「建学の理念」を確認する。「筑波大学概要」から引用する。

「筑波大学は、基礎及び応用諸科学について、国内外の教育・研究機関及び社会との自由、かつ、緊密なる交流連携を深め、学際的な協力の実をあげながら、教育・研究を行い、もって創造的な知性と豊かな人間性を備えた人材を育成するとともに、学術文化の進展に寄与することを目的とする。

従来の大学は、ややもすれば狭い専門領域に閉じこもり、教育・研究の両面にわたって停滞し、固定化を招き、現実の社会からも遊離しがちであった。本学は、この点を反省し、あらゆる意味において、国内的にも国際的にも開かれた大学であることを基本的性格とする。そのために本学は、変動する現代社会に不断に対応しつつ、国際性豊かにして、かつ、多様性及び運営の組織を開発する。更に、これらの諸活動を実施する責任ある管理体制を確立する」

「建学の理念」のキーワードは「あらゆる意味において、国内的にも国際的にも開かれた大学」である。（つくば市内の高校では茨城県立竹園高校、私立茗溪学園などが抜群の



「IMAGINE THE FUTURE.」の横断幕（筑波大学キャンパス）

とは言うまでもないだろう。学生数は、今年5月現在で、学群（学部学生）9798人、外国人（自費留学生）学生68人、外国人留学生（官費留学生）276人。大学院生6661人、外国人学生66人、外国人留学生1230人。総合大学としては際立った数字とは言えないが、大学院生の数が多いことが目に付く。文字通り「大学院大学」なのである。

「開かれた大学」として海外からの留学生が相当数に上っている。これに教職員数を加えると同大学の総数は約2万1000人になる。10箇所ほどある駐車場はいつも大学関係者や学生のマイカーで満車状態であり、マイカーが不可欠である。これは学生も同じである。

構内のペDESTリアンデッキや森の中の歩道を歩くと、スクールカラーのライトブルー（大学では「つくばブルー」と呼ぶ）に「40+101」と書かれた横断幕をしばしば見かける。同時に「IMAGINE THE FUTURE.」と書かれた横断幕もよく目に入る。後者は同大学の「ブランド・スローガン」である。言わば「商標（ブランド・イメージ）」のスローガンである。同大学1期生でコピーライターとして活躍している一倉宏が母校に夢を託して贈ったものだという。（以下『筑波大学IMAGINE THE FUTURE by AERA』（朝日新聞出版）、『筑波大学30年史稿』、『筑波大学の40年』など筑波大学関連文献を参考にする）。

「40+101」（つまり「141」とは何であるか。そこには、この大学の歴史と伝統さらには誇りが端的に表現されている。昨年（2013）10月、筑波大学は開学40年の節目の年を迎えたが、歴史は古く文明開化期の明治5年（1872）にまで遡る。この年、新橋・横浜間に鉄道が開通した。徴兵令が公布されたのもこの年である。筑波大学の創起は旧帝大系の国立大学（東京大学を除く）よりも古いことに注目したい。141年の歴史を

略記する。

同大学は明治政府の学制発布と同時に発足した日本初の教員養成校・師範学校が原点（母体）である。その後、東京師範学校と体操伝習所（体育学群の原点）となり、さらには東京高等師範学校（旧制中学（今日の高校）以上の教員養成校）と発展した。女子の高等教員養成校として東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大）が開校している。両校とも戦前の東京の文教地区にキャンパスを構える名門校で、高等教育界の指導者育成を目指したことから官費支給の優遇措置があった。在校生全員が授業料を免除されたのである。

昭和24年（1949）東京文理大学・東京高等師範学校・東京体育専門学校・東京農業教育専門学校が統合して東京教育大学の発足となった。筑波研究学園都市への移転を契機に、昭和48年（1973）10月、

進学率を誇っており、隣接する土浦市の県立土浦第一高校は今や県を代表する名門進学校である。地元3校からの筑波大学入学者は相当数に上り、その大半が研究学園都市の研究者や教育者らの子弟である。

◇

同大学に取材で出向くと、まず広大な緑豊かなキャンパスに圧倒される。木々の緑が映え、空気は都会では想像もできないほど新鮮である。都心の大学のように騒音に悩まされることもまずない。ふとかつて訪ねたアメリカ北東部の州立大学キャンパスにたまたまんでいるような錯覚を覚える。リスでも飛び跳ねていれば北東部のキャンパスそのものである。2系統のバスが巡回するキャンパスの広さは、「2014年版大学ランキング（朝日新聞出版）」によると、校地面積は1311万6510㎡で、全国の国公立立あわせて9位、校舎面積は70万950㎡で3位である。宿舎なども含めた敷地面積は2位（一時は1位だったが、今は九州大学にトップの座を譲っている）であるとのことだ。いずれにせよ広大な敷地の確保が容易でない首都圏の内外（関東地方）にある大学では群を抜いて広いのである。広大な緑のキャンパスが学生生活や学術研究にプラスの影響を与えることとなり今日に至っている。

◇

時代は明治26年（1893）に遡る。若き夏目金之助（後に文豪漱石）は東京高等師範学校の教壇に立った。141年の歴史の中のエポックの一つと考えたい。秀才夏目金之助は東京帝国大学文科大学大学院（英文学専攻）に進んだ後、同年10月、東京高等師範学校の英語教師嘱託となるのである。26歳。『夏目漱石』（小宮豊隆）の「就職」から引用する。（小宮豊隆は漱石門下のドイツ文学者。以下原文のまま）。

「漱石が（大学を）卒業してから、漱石の成績が非常によかったので、方々に就職口があった。その中で、学習院の口は、仲に立った人が大丈夫だということで、漱石はモーニングを拵えて待っていると、その口はアメリカ帰りの人か何かにとられてしまい、仕方がないから漱石は、一「張羅のモーニングを着て方々あるいていたという話は、漱石の講演『私の個人主義』の中に出ている。

その後、漱石には、高等学校（現東京大学教養学部）と高等師範と両方から、殆ど同時に口が掛った。『私の個人主義』に、「私は高等学校へ周旋してくれた先輩に半分承諾を与えながら、高等師範の方へも好い加減な挨拶をしてしまったので、事が変な具合にもつれてしまいました。（中略）。する」と或る日当時の高等学校長、今では慥か京

都の理科大学長をしている久原さんから、ちよつと学校まで来てくれという通知があったので、早速出かけて見ると、その座に高等師範の校長嘉納治五郎さんと、それに私を周旋してくれた例の先輩がいて、相談は極まった、こつちに遠慮は要らないから高等師範の方へ行ったら好かるうという忠告です。私は行掛かり上否だとはいえませんが承諾の旨を答えました。が、腹の中では厄介な事になつてしまつたと思わざるを得なかつたのです。というものは今考えると勿体ない話ですが、私は高等師範などをそれほど有難く思つていなかったのです。嘉納さんに始めて会つた時も、そうあなたのように教育者として学生の模範になれというような注文だと、私にはとても勤まりかねるからと逡巡した位でした。嘉納さんは上手な人ですから、否そう正直に断られると、私は益々貴方に来て頂きたくなつたといつて、私を離さなかつたのです。こう言う訳で、未熟な私は双方の学校を掛け持ちしようなどという欲張り根性は更になかつたにもかかわらず、関係者に要らざる手数を掛けた後、とうとう高等師範の方へ行く事になりました」と書いてある。(若い教官夏目金之助が教師や学生と一緒に撮つた写真が残されている)。―この嘉納治五郎の言葉は、『坊っちゃん』の中で、新任の坊っちゃんに言う、狸(校長)の言葉に酷似するところを持つている。しかしそれは今こゝでは問題ではない。当時漱石が受け取つた月給は37円50銭であつた。明治26年(1893)10月の日付で「高等師範学校英語授業を囑託し1ヶ年年金450円給与」(原文カタカナ)という辞令が、高等師範校から出ている。明



高等師範教師・漱石（後列左から2人目、『別冊太陽 夏目漱石』）

治26年10月27日狩野亨吉(学友)宛の漱石の手紙には、「生業兼て御出京中は種々御配慮を煩はし候処、その後高等師範学校英語教授の囑託を受け、去る19日より出講仕をり候へば乍憚御安息可被下候」と書いてある。

漱石は2年間東京高等師範学校の教壇に立つた後、明治28年4月、愛媛県尋常中学校(後に松山中学校を経て現県立松山東高校)の教諭として松山に赴任する。破格の高給であつた。松山は周知のように『坊っちゃん』の舞台である。

漱石の英語教育が高等師範学校にどのような影響となつて受け継がれたかは、私には論じることができない。東京高等師範英語英文科の卒業生で同校や東京教育大学で英語英文学を講じた英文学の泰斗福原麟太郎(1894・1981)は『夏目漱石』(荒竹出版)の「英語教師の挑戦」で「英語教師は、

いつでも、夏目漱石に挑戦している」と冒頭で書いている。そして漱石に影響を受けた作家や英文学者を列記した後書く。

「英語教師は、英会話をしたり、(英文の)手紙を書いたり、レットテルを読んだりする稽古事の先生では決してないのである。英米人は、いかに生きるか、いかに考え、いかに感じるかを、生の英語を教えることによって、日本の青少年に伝える役目を持つている。それが窓の第一の効用である。窓よ明るく開け。(中略)。(英語教師は)やはり、漱石に挑戦してみてほしい。漱石に挑戦するほどの人は、向学の精神に満ち、文学の喜びによつて生命をいきいきと伸ばしたいと思つている人だ」

福原は2年間とはいえ若き漱石が母校の教壇に立つたことを同じ英文学を専攻する後進の学者として誇りに思つている。後に国民的作家となる漱石の影響は明らかであろう。

漱石を高等師範学校の英語教師に招いた初代校長嘉納治五郎(万延元年(1860)・昭和13年(1938))について語りたい。同校の偉大な創始者嘉納を語ることは、高等師範学校から東京教育大学を経て筑波大学まで(明治・大正・昭和・平成まで)の141年間校風として受け継がれて来た「文武両道」や国際性尊重の精神を語ることになる。つまり「二つの金メダル」の原点を再確認することになる。筑波大学・大学会館前の広場に和服姿の嘉納のりりしい立像が立っている。(以下『気概と行動の教育者 嘉納治五郎』(筑波大学出版会)を参考にする)。

嘉納の生涯を略記する。講道館・柔道の創始者としても知られる嘉納は、明治・大正期学部段階の学生の教育指導について包括的な責任をもつ組織である。学類は、学群に属し、学生の教育指導について基礎的な責任をもつ組織である。大学院は8つの学群である。その大きな特徴を具体的に記せば、①専門分野を異にする教員及び学生との接触・交流を通じて、広い視野を養ひ、豊かな人間形成に資するよう配慮する。②既存の学問の体系に必ずしもとらわれないことなく、教育上の観点から将来の発展の基礎を培うことができるようにする。いわばクロスオーバーさせた学科なのである。同大学の「顔」の一つともいえる体育専門学群と芸術専門学群には学類はない。旧来の文系・理系といった「壁」を打破しており、既成の概念ではとらえきれない。

生命環境学群を取り上げて見る。同学群は21世紀に入り社会的にも大きな注目を集めている「生命と環境」を共通キーワードとする「生物学類」「生物資源学類」「地球学類」の3学類から構成されている。組織構成員、教育研究分野とも大学院(生命環境科学研究科)とほぼ同一だという。教育目標は問題発見・解決型能力を身につけ豊かな人間性を育むことにより、日本の生命環境科学分野の中心的担い手となる人材、国際的視野に立つて活躍できる未来創造型の人材を育成することである。

医学群では医学類、看護学類、医療科学類があり、国家試験を目指して勉学や臨床実験に励んでいる。国家試験の合格率は全国でもトップレベルである。

(参考文献：『筑波大学 IMAGINE THE FUTURE by AEA』(朝日新聞出版)、『筑波大学30年史稿』、『筑波大学の40年』、『気概と行動の教育者 嘉納治五郎』(筑波大学出版会)、つくば市関連資料など) (一〇一)



嘉納治五郎像 (筑波大学)

の著名な教育家であり、日本の初代I O C (国際オリンピック委員会)委員、日本体育協会の創設者である。嘉納は、幕末に摂津国御影町(現兵庫県神戸市東灘区)の酒造家嘉納治郎作の三男として生まれる。進学校で知られる私立灘高の構内に嘉納の像が立っている。同地出身の教育者だからである。明治8年(1875)東京帝国大学の前身、開成学校に入学する。勉学のかたわら福田八之助について天神真楊流、飯久保恒年について起倒流の柔術を学ぶ。明治15年卒業して、学習院英語教師となるかたわら、下谷稲荷町の永昌寺の書院を借り、塾を開いて「講道館」と名付け塾生に柔道を教える。今や世界共通語となつた柔道(ジュード)は嘉納の造語である。

明治22年九段富士見町に道場を開き、柔道諸流派の技術を統合し、体育的に再編成した流儀を完成し、講道館柔道の名乗りをあげた。文部省から海外視察に派遣された後、第5高校(現熊本大学)校長となり、文部省参事官、第1高校(現東京大学)校長を経て、明治26年(1893)東京高等師範学校の校長となる。嘉納は体育(英語PE (Physical

Education)を嘉納が和訳)を奨励し、体育科を新設して体育教師の育成に努めた。(筑波大学はスポーツ競技の各分野で優秀な成績を残し、多くの選手や指導者を輩出している。だが非近代的ともいえる「体育会」系的な伝統や精神は、その指導方針に全くなく極めて自由である。「スポーツを科学する」。これこそ嘉納の一大遺産であろう。ちなみに名選手を輩出している同大サッカー部の指導理念は「良き選手」「良きチーム」「良き指導者」(これ!〜)である)。

嘉納は同校校長を3期23年余り務めた。明治42年(1909)I O C会長クーベルタン男爵の委嘱でアジア初のI O C委員に就任した。明治44年大日本体育協会を設立し、三島弥彦(東大)、金栗四三(東京高師)の両選手を選抜して自ら団長となり、オリンピックの初参加を実現した。(1912年のストックホルム大会)。昭和13年(1938)カイロで開催のI O C総会に出席しての帰途、氷川丸船中で肺炎のため急逝した。享年77歳。

筑波大学は国立大学ならではの伝統と特色を生かしながらも、日本で初めての抜本的な大学改革を行い、「開かれた大学」「教育と研究の新しい仕組み」「新しい大学自治」を特色とした新構想大学として、旧態依然たる大学の改革に先導的役割を果たしつつ、教育研究の高度化、大学の個性化、大学運営の活性化など、活力に富み、国際競争力のある大学づくりを推進しているという。大学改革の一つに学部制を廃止して学群・学類制を導入したことがあげられる。「大学概要」によれば、9つの学群は、教育上の目的に応じて組織され、